

平成27年度 研修記録



茨城県学校長会
県西地区校長会連絡協議会

「研修記録」発刊にあたって

県西地区校長会連絡協議会会長 江原 陽子



9月の関東・東北豪雨により、県西各地が大きな災害に見舞われました。被災された方々、そして今なお大変なご苦勞をなさっている方々に対しまして、心よりお見舞い申し上げます。特に常総市におきましては、通常の教育活動を行うにはまだまだ時間のかかる状況であり、一日も早い復興を願うばかりです。そのような中、全郡市より校長先生方が集まり、県西地区校長研究協議会研修会が開催できましたこと、大変有難く思っております。またご多用のところ、ご来賓として茨城県県西教育事務所長 鈴木 悟 様、県西地区市町教育長代表 青柳 正美 様、茨城県学校長会副会長 倉持 利之 様、講師として県西教育事務所の先生方のご臨席を賜りましたことに深く感謝申し上げます。

今回の研修会では、研究主題を「創意と自校の実情を生かした学校経営の研究と実践」といたしました。分科会でご提案いただいた菊池哲也校長先生（絹川小）、鈴木一也校長先生（大形小）、篤緑校長先生（古河三小）、宇佐美徹校長先生（岩瀬西中）、小林清校長先生（坂東東中）には、お忙しい中でのご準備とご発表、誠に有難うございました。いずれの分科会においても数々の具体的実践に基づいた提案並びに意見交換や情報交換等で、活発な協議ができました。また、助言者の先生方からも貴重なご指導をいただき、とても有意義な研修となりました。各校での明日からの実践に役立てていただけることと強く期待しております。

講演会につきましては、宮大工棟梁 小川 三夫 様にお越し、「不揃いの木を組む」という演題でご講演をいただきました。お話の中で数々の心に残るメッセージがありました。「無駄をさせて、無駄に気づかせて、無駄をなくすことを考えさせる」「厳しさのないやさしさは甘えにつながる」「人は育てるのではなく自ら育つ」「不揃いの一本一本が支え合ってこそ全体がより安定する」等、ビジョンを掲げ、人や組織を動かす立場にある私たちに多くの示唆をいただきました。これを機に、改めて自分の経営を見つめ直すとともに今後の学校経営に生かしましょう。

本研修会は、年一回の貴重な機会であり、各学校における今後の学校経営の一助となるものと言えます。また、研究委員さんのご努力で作成されたこの研修記録には、学校教育が直面している諸課題の解決のための多くのヒントがまとめられており、有効な資料となっております。更なる経営推進の出発点として活用していただければ幸いです。

現在、教育改革が様々な形で急速に進んでおります。校長先生方には、時にその波に押し流されそうになったり、流れの中で迷ってしまったりする瞬間があるのではないのでしょうか。そんな時、私は「乾いたタオルでも知恵を出せば水が出る」という言葉を思い出します。たとえ行き詰まった状況に直面してもみんなで知恵を出し合い、手間をかければ必ず何らかの手立てが見つかる、道も開ける、そう考えます。そして知恵を出し合う仲間とは各校の教職員であり、校長先生方同士であります。これからもつながりを大切にして、共に学校づくりに全力で臨みましょう。

最後になりましたが、「県西地区校長研究協議会研修会」の計画並びに準備、運営まで、きめ細かく進めていただきました県西校長会研究委員の先生方に深く感謝申し上げます。

目 次

県西地区校長研究協議会記録	-----	1
第1分科会（小学校）	-----	2
○ 提案発表 「創意と自校の実情を生かした学校経営の研究と実践」		
－ 校務分掌を基に組織を生かすことを通して －		
○ 研究協議・講師指導		
第2分科会（小学校）	-----	4
○ 提案発表 「創意と自校の実情を生かした学校経営の研究と実践」		
－ 教職員の参画意識の高揚を通して －		
○ 研究協議・講師指導		
第3分科会（小学校）	-----	6
○ 提案発表 「創意と自校の実情を生かした学校経営の研究と実践」		
－ 地域の教育力を生かした人づくりをめざして －		
○ 研究協議・講師指導		
第1分科会（中学校）	-----	8
○ 提案発表 「創意と自校の実情を生かした学校経営の研究と実践」		
－ 確かな学力の向上を目指す学校経営を通して －		
○ 研究協議・講師指導		
第2分科会（中学校）	-----	10
○ 提案発表 「創意と自校の実情を生かした学校経営の研究と実践」		
－ 知力・気力・体力をかねそなえた人間性豊かな生徒の育成を目指す 小規模校の取り組み －		
○ 研究協議・講師指導		
教育講演会	-----	12
演 題	「不揃いの木を組む」	
講 師	宮大工棟梁 小川 三夫 先生	

県西地区校長研究協議会記録

- 1 期 日 平成27年10月20日(火)
- 2 会 場 茨城県県西生涯学習センター
- 3 主 催 茨城県学校長会 県西地区校長会連絡協議会
- 4 目 的 茨城県学校長会の活動目標を踏まえて、学校経営の創意に視点を置き、当面する諸課題について研究協議し、施策の具体化を考究するとともに、校長としての資質の向上に資する。
- 5 研究主題 「創意と自校の実情を生かした学校経営の研究と実践」
- 6 参加者 県西地区小中学校長 146名
- 7 講 師 県西教育事務所 人事課長 稲川 善成 先生
学校教育課長 猪野木雅明 先生
管理主事 篠崎 浩 先生
管理主事 栗原 恵子 先生
主任指導主事
兼生徒指導班長 飯村 晃 先生
- 8 来 賓 県西教育事務所長 鈴木 悟 先生
県西地区市町教育長代表 青柳 正美 先生
- 9 日 程 受付 12:30～12:50
全体会 13:00～13:40
分科会 13:50～15:10
(小学校3分科会, 中学校2分科会)
講演会 15:25～16:45
- 10 全体会(開会行事) 13:00～13:40
(1) 開会のことば
(2) 県西地区校長会連絡協議会会長あいさつ
(3) 茨城県学校長会会長あいさつ
(4) 来賓あいさつ
県西教育事務所長 鈴木 悟 先生
県西地区市町教育長代表 青柳 正美 先生
(5) 来賓及び講師紹介
(6) 日程説明及び会場案内
- 11 教育講演会 15:25～16:45
演 題 「不揃いの木を組む」
講 師 宮大工棟梁 小川 三夫 先生

小学校 第1分科会

司会者 結城市立結城西小学校 栃木 孝行
提案者 結城市立絹川小学校 菊池 哲也
記録者 結城市立城西小学校 森田恵美子
講師 県西教育事務所人事課管理主事 栗原 恵子 先生



【協議題】 創意と自校の実情を生かした学校経営の研究と実践
ー校務分掌を基に組織を生かすことを通してー

結城市立絹川小学校長 菊池 哲也

【提案趣旨】

1 はじめに

本校は、学校教育目標「進んで学び心豊かにたくましく共に生きる子の育成」を具現化するために、「子どもあるところに教師あり」のスローガンを掲げ、チーム絹川として一丸となって日々熱心に子どもたちに携わっている。校務分掌を基に、組織を生かす工夫を提案したい。

2 本校の概要

児童数247名で11学級。児童は、明るく素直で元気に外遊びをする姿が見られる、反面、自己表現は苦手な積極性に欠ける。地域は大変協力的である。

3 本校の学校経営

学校教育目標具現化のため「学力向上、豊かな心、体力向上」の3つのプロジェクトを掲げ、チームを編成して取り組んでいる。また、地域・保護者との連携も柱にしながら「役に立つ人になろう」を合言葉に感謝の心を大切にしながら学校経営に取り組んでいる。

4 実践の内容

(1) 学力向上プロジェクト

①基礎的基本的な学習内容の定着 ②校内研修の実施 ③読書の推進

*教科主任，研究主任を中心にした計画的な取組，振り返りの実施と校長の授業参観

(2) 豊かな心プロジェクト

①陸上選手を励ます会 ②通学班遊び ③いじめチェックリストの活用(毎日提出管理職もコメント)

④QUテストの活用

*プロジェクトチーフを中心に子どもたちが主体的に活動できる場の設定，事前指導の徹底，職員同士の話し合いでの課題解決，月ごとの振り返り，管理職のかかわり

(3) 体力向上プロジェクト

①体力向上プロジェクト(投力向上に絞った取組) ②陸上練習 ③水泳指導研修(外部講師)

*生徒指導主事を中心に主体的に問題解決に当たる安全な学校づくり

(4) 地域や保護者との連携

①登校ボランティアの方への感謝の会 ②蚕の飼育 ③迎への保護者の対応

④米作り体験学習 ⑤絹川地区ホテル祭り ⑥絹川地区自治協力員との会合

*地域や保護者との双方向の積極的なかかわり

5 成果と課題

(1) 成果

- ・組織として各部員が力を発揮し協力して取り組もうとする意識の高まりが見えること。
- ・学校評価でもそれぞれの内容で良い結果が得られた。
- ・投力向上プロジェクトによって成果が見られた。
- ・地域や保護者の積極的なかかわりで学校を深く理解していただき協力も得られた。

(2) 課題

- ・PDCA検証サイクルの確立が必要である。
- ・校長としてリーダーを生かす意識を常に持っていたい。

6 終わりに

学校としての組織体制が整ってきており、組織を生かすことを通して子どもたちに何が大切かという本質を見失わずに取組を継続していきたい。

【研究協議】 ※ 司：司会，質：質問，答：答え，発：発言，意：意見

- 質 プロジェクトを組むことによって一部の人に負担が集中することはないか。組織を動かす工夫は。
- 答 教務主任を中心に計画的に進めることで集中を避けている。しかし、会議は多くなる傾向にある。
- 意 校務分掌とプロジェクトが二重構造となる。校務分掌を中心にリーダーを立てておくとよい。
- 司 組織を生かすのにプロジェクトチームを立ち上げるというのはどうか。そのような実践校は。
- 質 既存の分掌とプロジェクトの関連をどのように図っているか。また、時間はどう生み出しているか。
- 答 生徒指導主事が「豊かな心」のリーダーになっている。「学力向上」は毎週定期的に会議を行い、その他は必要に応じてリーダーの呼びかけで会議を持っている。
- 発 学校規模にもよるが学校の重点課題でプロジェクトを組み、そこから絞り込んで組織目標を設定している。教員評価などとも連動させながらうまく機能している。
- 質 月ごとの振り返りはどのように行っているのか。
- 答 振り返りの大切さについて助言し、声かけを行っている。
- 意 学校の重点目標に対して、年間計画を自分たちで作成し、月ごとの振り返りを行っている。教職員一人一人がどんな子どもに育てたいのか、そのためにどんな手立てがあるのかをはっきりと持つことが大切である。努力事項についてはそれぞれについて検証しておくことが次につながることになる。
- 発 振り返りや評価をするときに目標や評価指標等が何もないと判断できない。自己申告書でも同じである。
- 司 絹川小の場合キーワードや合言葉が振り返りの基になるのではないか。
- 質 それぞれのプロジェクトの課題とチームリーダーへどのような助言をしているか。
- 答 絹川小は職員の構成がよく、メンバーのバランスも良い。教職員に学校の課題をどう意識させるかという視点で助言指導をしている。「一人ではなくみんなで、チーム絹川」にしようと声かけを繰り返している。



【講師指導】

- 菊池校長の発表から
 - ・「校務分掌を基に組織を生かす」ことを研究の柱にして発表がなされた。個業型組織になりがちな学校組織を協働型組織へ変革させることが組織を生かすことになる。絹川小学校では、その方策としてプロジェクトによる取組を行い、チームを機能させている。それぞれのプロジェクトが課題を絞り込み成果を上げているところがすばらしい。
- 組織を生かして学校力を高めるためには
 - ・組織マネジメントを意識して、教職員一人一人の参画と協働をつくりだすことが大切
 - ・R（実態把握）P（目標設定）D（実行）C（評価）A（改善）サイクルを回していくことで教職員も児童生徒も向上していく。
 - ・最も大切なのはR（実態把握）である。その中でも「原因特定」が最も大切。課題を洗い出しても原因が分からないのでは改善につながらない。
- チームワークの効果
 - ・チームワークの水準が高い学校では、「職員の満足度が高くストレス傾向が低い」「教員の授業力が伸びやすい」「学力の維持向上に成功している」が見られる。
 - ・チームワークの高い学校は、「コミュニケーションの量が多い」「助け合える風土」「チーム効力感を持っている」が見られる。
- 校長がリーダーシップを発揮し「この校長のもとならできそうだ」と思わせるような経営をしていく。

小学校 第2分科会

司会者 下妻市立騰波ノ江小学校 片倉 順
提案者 下妻市立大形小学校 鈴木 一也
記録者 下妻市立宗道小学校 落合千鶴子
講師 県西教育事務所 管理主事 篠崎 浩 先生



【協議題】 「創意と自校の実情を生かした学校経営の研究と実践」
—教職員の参画意識の高揚を通して—

下妻市立大形小学校長 鈴木 一也

【提案趣旨】

1 はじめに

本校に赴任して2年目となった。校長としての思いをどう学校経営に反映させていくか、見えてきた課題に対してどう取り組んでいったらよいのかについて、校長がリーダーシップを発揮し、全職員と共に熟考して本年度をスタートさせた。これまでの実践を振り返ってみたい。

2 本校の概要

学校は鬼怒川沿いに位置し、学校付近の河川敷は国土交通省により「水辺の楽校」として整備され、年間を通して繰り広げられるイベントに子供達が積極的に参加している。児童数 184名、8学級、教職員 20名、教員の平均年齢 42.9歳。子供は明るく素直だが、競争心に欠ける。

3 経営の実際

(1) プロジェクトチームによる学校経営の見直し

① 学校教育目標プロジェクト（担当：企画委員）

- ・校長の教育理念の周知 ・「目指す子供像」の意見集約
- ・保護者・地域の学校教育への期待感の意見集約

② 教育課程プロジェクト（担当：教務主任，低・中・高ブロック主任）

- ・読書強化週間の設定 ・道徳の時間を毎週火曜日の1校時に設定

③ 思いやりのある子プロジェクト（担当：道徳主任，特活主任，生徒指導主事）

- ・全学級「道徳の授業」の保護者への公開 ・校長の「道徳の授業」への参加
- ・各種模範となる子供の表彰 ・クリーン作戦の実施 ・通学班による活動

④ 進んで学習する子プロジェクト（担当：研究主任，学習指導部員）

- ・TTによる始業前&朝自習への取組 ・全学年で算数科TTの実施 ・大形タイムの設定
- ・算数科の研究への取組 ・教職員の相互授業参観と子供の上学年の授業参観

⑤ たくましい子プロジェクト（担当：体育主任，保健主事，給食主任）

- ・そよ風タイム&ロング昼休みの設定 ・陸上記録会に向けた全職員での取組 ・食育の推進

⑥ 校内研修プロジェクト（担当：研究主任，教頭，教務主任，生徒指導主事）

- ・研究指定等への積極的な取組 ・一人一研究授業の実施 ・全職員による算数科指導案の作成

(2) 望ましい人間関係の構築

① 教職員との関わり

- ・職務に関するアンケートの実施 ・アフター4研修 ・教職員間のコミュニケーションづくり

② 子供との関わり

- ・誕生日プレゼント ・地区別交流給食&卒業生との会食

(3) チーム意識を持たせる運営

① 一人一人の意見を尊重した校務分掌の決定

② 協働体制による環境整備

③ 小中連携の取組

4 終わりに

教職員一人一人の参画意識を高めることの重要性を痛感した。活力ある学校づくりを目指したい。

【研究協議】 ※ 司：司会，質：質問，答：答え，発：発言

質 教育目標を変えるにあたり、どの段階から取り組んだのか、小中連携を意識したのか。

答 赴任した時、分かりにくいと思ったことがきっかけ。千代川中と同じにするという意識はなかった。生きる力を育てることには変わりがないから、目標が同じように整合していったということか。目指す生徒像を意識して3校が連携していきたい。

質 教育目標を変えるにあたっての保護者・地域の意見集約方法は。

答 保護者には学校評価やPTAの役員会で、地域は地域教育推進委員会の会合や学校行事での子供の姿から意見収集。

質 教育目標を短くすると、校訓やみんなが覚えやすい組織目標との兼ね合いは。

答 組織目標は、今の子供達が最も必要なものにしぼっている。学校教育目標が大きければ大きいほど組織目標は学校教育目標に含まれてくるので、そこを意識している。

質 この学校規模でプロジェクトのダブリが出てきたときの工夫は。

答 当然ダブリはある。一年間を通して成果を看取っていくところまでは要求していない。まずは年度初めにみんなで見直そう・見直したことはみんなでやろうということで。プロジェクトとしてだけでなく、教育目標の具現化に向けて教職員が一体感をもって進めている。

質 鈴木先生のエネルギーの源、名言、大事にしているものは。

答 「仕事はやれば終わる。人間関係が崩れたらストレスは溜まる。みんなで仲良くやろう。」と雑談の中で言っている。職員室での雑談がストレスの解消になるような職場経営をしたい。

司 大雨災害で、校長としてこう決断してよかったということをお話しいただきたい。

発 体育館が避難所になったが、マスコミ対応は市の職員と決めたので、管理職が自由に動けた。

発 防災倉庫にラジオを入れてもらうように要望。職員の管理について課題が残った。(下妻市)

発 避難所運営に従事した職員に特殊業務手当はどこまで出せるか、出せる仕組みにしていかななくてはならないと感じた。(常総市)

発 マニュアルはあっても機能しなかった。避難指示が出て38%の子供は避難したが、他は家にいた。防災無線が生かされていなかった。連絡徹底の方法が課題。(古河市)

発 エリアメールが機能した。学校は避難所になっていない。市の公共施設が避難所。(桜川市)

発 まちcomiメールをチェックしない母親が登校させてしまうというケースがあった。(筑西市)



【講師指導】

- プロジェクトチームによる学校経営の見直しは、鈴木校長のパワーや活力を感じた。
 - ・「学校教育目標プロジェクト」…学校教育目標をかえるとき、伝統・地域・教職員（過去の教職員を含めて）・児童・保護者様々な意見を集約して行う。SWOT分析も効果的な手立てである。学校教育目標の設定については、学習指導要領の総則の(1)から(6)がポイント。(6)の「評価が可能な具体性を有すること」に集約される。
 - ・「思いやりのある子プロジェクト」…道德の時間を毎週火曜日に設定し、全校体制で道德授業の実践を工夫している。学校教育活動全体を通じて行う道德教育の充実が叫ばれているが、模範となる子供の表彰や通学班による活動等、多岐に渡って効果が上がってきている。
 - ・「進んで学習する子プロジェクト」…5つの方策は、学診テストや全国学調の結果を分析した中での取組。教員の相互授業参観と子供の上学年の授業参観なども校長の強い思いから。
 - ・「たくましい子プロジェクト」…体力テストの結果分析等からの取組。
 - ・「校内研修プロジェクト」…「与えられた研修」から「求める研修」へ。チームワークを重視したレベルアップという視点。研修を適切に評価し、成果と課題を明確にして工夫改善を。
- 望ましい人間関係の構築については、OJT機能をうまく活用しながらの経営に、「信頼・尊重・愛情」が感じられた。
- チーム意識をもたせる運営として、教職員の意見を尊重しながらの校務分掌決定は、職員を円滑に動かすための効果的な方法である。学校運営を円滑に進めるために、常に工夫改善をしようとする校長の思いが先生方に浸透してきている。今後は、如何にPDCAを回していくかが鍵となる。

小学校 第3分科会

司会者 古河市立古河第一小学校 和久 俊明
提案者 古河市立古河第三小学校 篤 緑
記録者 古河市立古河第七小学校 金久保敬二
講師 県西教育事務所 学校教育課長 猪野木雅明 先生



【協議題】 創意と自校の実情を生かした学校経営の研究と実践
ー地域の教育力を生かした人づくりをめざしてー

古河市立古河第三小学校長 篤 緑

【提案趣旨】

1 はじめに

本校は、教育活動全般において地域の協力や支援をいただいております。学校教育目標を具現化するために、全職員が一丸となって、地域の力をバックに学校改善に取り組んでいます。

2 本校の概要

児童数308名、学級数16、教職員は21名で、平均年齢は46歳。児童は、明るく素直であり、学力向上に向けた取り組みの成果が表れているが、発達障害傾向のある児童が増えており、個への組織的な対応も必要である。

3 本校の学校経営

(1) 学校教育目標

友だちいっぱい 元気いっぱい 知恵いっぱい

(2) 経営の基本方針

- ① 喜びのある学校づくりをめざす。
- ② 学校の主体性と創意工夫で教育の質を高める。
- ③ 教育の目標を明確にして結果を検証し質を保証する。
- ④ 教師にゆるぎない信頼を確立する。
- ⑤ 積極的に情報を発信し、地域と共に歩む学校づくり、郷土古河を愛する人づくりを推進する。

4 地域の教育力を生かした教育活動の実践

(1) 学力の向上

- ・教職員の指導力を高めるための校内研修の充実と組織の活性化
- ・「三小学習プラン」の作成、サンサンカード（個別の学習プラン）の活用
- ・タブレットを活用したICT教育の推進
- ・小中連携の充実（英語出前授業・小学校専科家庭科指導員の授業・学びの広場サポート等）
- ・地域素材を生かした学習や科学教室の実施（Sun Sun Science School）

(2) 豊かな心と健やかな体の育成

- ・あいさつ運動の実施（古河三中との駅前あいさつ運動・古河一高野球部との連携）
- ・学校・保護者・地域が連携した三小祭の実施（地球ステージ4等）
- ・おやじの会との連携（「夢先生」の招待）
- ・珊瑚会主催事業へ協力（三小祭・三小盆踊り大会）
- ・ふれあいセンター「あさひ」との交流
- ・夏季休業中の保護者との連携（灌水・パトロール・ラジオ体操・神輿等）
- ・自校給食を活かした食育の推進

5 全職員参加による地域行事への協力

6 成果と課題

一人一人を大切にしたり日頃のきめ細やかな関わりや取り組みの成果が出ているが、「あいさつができていない」等の指摘もある。今後も、さらに地域と共に歩み地域からの信頼を得ながら、改善に努めていきたい。

7 終わりに

全職員で、「フットワーク・ネットワーク・チームワーク」を大切に、子どもたちを取り巻く様々な人たちに学校運営に参画していただきながら、郷土古河を愛し、伝統ある古河三小を誇りに思う人づくりをめざしていきたい。

【研究協議】 ※ 司：司会，質：質問，答：答え，発：発言

質 地域との連携を深めていく中で、教頭との連携をどのようにしているのか。

答 校長の意向を伝えながら推進しているが、教頭は、地元の中学校（古河第三中学校）から異動してきたので、地域の方々との関係も深く、中学校との連携もとりやすい。

質 家庭学習のマイプランは、一年間を通して実施しているのか。

答 一年間を通して実施しており、古河市全体で取り組んでいる。家庭学習の取り組みに関しては、個に応じた配慮を加えながら対応している。

司 「地域の教育力を生かした人づくりをめざして」という副題をもとに、地元出身の校長として、地域の教育力をどのように生かしていくか。について協議をすすめていきたい。

発 いろいろな苦労はあるが、盆踊りについては、6年目を迎え地域の中心的な立場の人から教職員への協力要請があり、学校としては段階を踏んで、教職員へ配慮をし、理解を得ながら対応している。

質 盆踊りや三小祭、運動会など、地域密着型の行事がたくさんあり、協力体制に関して、参考にさせていただきます。

ふれあいセンター「あさひ」（デイサービス）との交流は、どのようにしているのか？

答 施設利用者とは、お花見会などの行事に招待したり、休み時間なども日常的に交流している。

質 父親のかかわりも大切だと思いますが、子どもたちの教育のために、おやじの会などはどのように協力しているか。

答 おやじの会は、主体的に取り組んでおり、活動が定着している。PTAの役員やOBも多く、たいへん協力的である。

質 学校ではあいさつをするが、地域ではあまりしないなどの二極化が見られますが、解決策としていいアイデアはあるでしょうか。

答 全校集会や学校便りなどで、校長自らあいさつが定着できるようにPRしている。

意 中学生よりも小学生の方が声は小さいと感じる。環境にもよるが、通学班などでは、班長が見本を示したり、大きな声であいさつの練習をしたりすることで、効果が見られた。

司 地域の教育力を生かしていくためには、地域の力を借りるだけでなく、地域の役に立つ、地域への協力も必要だと考える。



【講師指導】

- 「学習を通じた人づくり」では、学びの広場や理科体験学習等、多種多様な人が子供たちにかかわり、様々な出会いがある。その出会いや専門性が人を育てている。
- 「あいさつで人づくり」では、教師が児童一人一人に丁寧なあいさつを実践し、あいさつで心を育てる。また、高校生のあいさつや清掃等の協力に対して、単なるボランティアではなく心を耕す材料と受け止め、子供たちの心を育てている。
- 「学校行事で人づくり」では、地域人材が本気で学校の行事等に参画しており、関係団体の強力な協力を得て、子供を育てている。
- 「あさひ」との交流での人づくりでは、お年寄りの方々との日常的なふれあいを通して、いたわりの心や穏やかな時間等を体験している。
- 地域に根ざした学校にしていくためには、職員が地域の学校に勤務する一員であるという自覚を持ち、学校が積極的に地域に出向くことも大切である。
- 学校ではかかえきれない多種多様な問題に関しても地域を味方にし、協力体制を確立する必要がある。
- 地域の教育力を生かすためには、まず、児童の実態を正しく把握し、育てたい力を明確にする必要がある。

中学校 第1分科会

司会者 桜川市桃山中学校 枝川 健
提案者 桜川市立岩瀬西中学校 宇佐美 徹
記録者 桜川市立岩瀬東中学校 深谷 治之
講師 県西教育事務所 主任指導主事兼生徒指導班長 飯村 晃 先生



【協議題】 創意と自校の実情を活かした学校経営の研究と実践
—確かな学力向上を目指す学校経営を通して—

桜川市立岩瀬西中学校長 宇佐美 徹

【提案趣旨】

1 はじめに

本校は、素直で純朴な生徒が多く、落ち着いた学校生活を送っている。基礎的・基本的な知識及び技能の習得はよいが、記述式や活用の問題等に課題がみられる。

2 本校の概要

生徒数316名で通常学級9，特別支援学級2の中規模校。自然環境豊かな学校である。

3 学校経営の方針

(1) 学校教育目標 自ら学び、心豊かで、たくましく生きる生徒の育成

(2) 経営の方針 提案型の学校経営を展開し、職員の経営参画意欲を高めるとともに、学校組織マネジメントによる学校運営の工夫改善に取り組む。

4 学力向上を目指す学校経営の視点

〔視点1〕年間を見通した学校運営マネジメントサイクルの確立

〔視点2〕授業改善の自己検証改善サイクルへの意識を高める教員評価の充実

〔視点3〕授業改善の焦点化による校内研修の充実

〔視点4〕学習の連続性を重視した小中学校連携の充実

以上の視点を踏まえ、3つのプロジェクトチーム（学び・こころ・健康）及び岩瀬西中学校区小中連携協議会を基盤に、学校の課題解決に取り組むこととした。

5 研究の実際

〔視点1について〕・学校運営年間計画表の策定（前年度2月）

・学校評価による学校運営の工夫改善→年2回学校評価を実施。学校評価検証シート作成

・月別学校経営の説明→学校運営マネジメントの意識の高揚を図る。

〔視点2について〕・教員評価と学校評価の関連 ・学校組織を活かしたグループ目標の策定

・目標の連鎖を踏まえた自己目標の設定

【授業改善の視点】 ①目標達成に迫る言語活動の効果的な位置付け

②基礎的・基本的な知識及び技能の確実な定着を図る学習活動の工夫

③学び合い活動を重視した授業展開の工夫

・自己目標の達成状況の評価

授業計画シート（本時の目標，板書計画，授業改善の視点を踏まえた一手間一工夫）活用

〔視点3について〕・教科横断的な研究テーマ及び研究内容の設定

・教科の枠を超えた校内研修体制の充実

・授業改善の実現を目指すアクションの重視（研究の最も主要な実践）

授業改善プランの策定→授業改善（一手間・一工夫）の日常化→

・家庭学習の習慣化に向けた取組→西中ノート「K I Z U N A」

・全国学力・学習状況調査及び県学力診断テストの検証・授業改善

〔視点4について〕岩瀬西中学校区小中連携協議会の実施

・小中共同実施事項→あいさつ運動・早寝。早起き。朝ごはん運動・ノーメディアデー

・児童生徒の発達段階に応じた基本的な学習行動を明確にした共通実践→学習の連続性確保

〔その他〕レベルアップタイムの実施（放課後15分間＝月から水の3日間）

6 終わりに

教職員の授業改善への意識が徐々に高まり、生徒の学力向上の兆しも見えてきている。

どんな場面で
どんな手立てで
どんな学習行動を
実現させるか

【研究協議】 ※ 司：司会，質：質問，答：答え，発：発言，意：意見

質 資料9の「授業改善プラン」はいつ、どのように作成し、授業改善にどう生かしているのか。

答 授業後すぐ、ワークショップ型の研究協議を行い作成。次の授業から生かすようにしている。

司 情報交換も兼ねながら、協議を進めていきたい。

質 資料6に掲げられている評価指標の数値は、何を元に設定しているのか。

答 プロジェクトチームが比較検討し、学年部が掲げた数値を元に、学校としてここまでにした
いという思いも込めて設定する。評価項目は、全国学力学習状況調査の項目を参考にした。

質 小中連携の中で、学習の連続性というのは、どういう取組として捉えて実施されているのか。

答 岩瀬西中学校区で考えている学習の連続性というのは、これまで、小学校ごとに別々にやっ
ていたものをできるだけ合わせていくなど、小中9か年を見据えた教育活動の実践である。今
年度は、学習の思考の中で「振り返り」をキーワードに授業改善の連携協議を進めている。

司 教育課程の部分での連続性については、現在桃山中で2年5か月後の義務教育学校開校に向
けて、学習や生活ルール等のスキル面のギャップをなくすことを基本として協議している。

発 小中で同じ項目で同じ取組をすることは、子どもが困らない。

先生によって授業のやり方が違うのでは、子どもが戸惑ってしま
う。子どもが困らないということを目指していきたい。

発 結城では、今年から始まった中学校の「学びの広場」に小学校
の先生に指導に来てもらった。自分たちが送り出した中学生
の実態を知ること、小学校の指導にも役立っている。



【講師指導】

宇佐美校長の発表は、P D C Aサイクルをうまく生かした授業改善への取組であり、学力向上
に向けた中学校の課題を解決する具体的な内容である。

1 学力向上に向けてこれまでの中学校の取組から見えてきた4つの課題

○全職員での取組の難しさ

- ・学校運営年間計画表の作成→年間のプロジェクトの流れが一目で分かり共通理解できる。
- ・教員評価（自己目標設定の手引き）の在り方

自己目標を「どのような場で」「実現したい学習行動は何か」「どのような方法で実現
させるのか」等を、具体的に設定している。全職員で取り組むために重要である。

○ 授業改善に向けた取組の難しさ（依然として課題が見られる内容の克服）

- ・各教科の授業改善プランの策定

課題のある単元→研究授業→改善策。小中で共有し、小学校でもやってみる。

○ 若手教員の増加（若手しかない教科，人数が少ない教科）

- ・学級経営研修の充実

学級経営を基盤とし、教員同士が話し合える場の設定。研修センターの校内支援の活用。

○ 一番の課題は、切り込み隊長の育成

専門教科ではないからと遠慮せず、積極的に授業改善に関わっていくリーダーの育成（教
務主任や研究主任等）。職員室の中に授業の話があふれるような職場をつくる切り込み隊長。

2 これからの授業づくりのポイント

① ねらいを明確にする→実現した姿をイメージする。

② 一人一人のつまずきを予想し、つまずきをなくす手立てを準備する。

- ・つまずきの原因が違えば手立ても変わる。→今日はどこでつまずき、その原因は何か。何
がなくなれば、つまずきがなくなるのかを協議→先生方の授業力をアップにつなげる。

③ 話し合いの構想を準備する→「何を」「どのように」話し合い、全員でねらいを実現させるか。

④ 学習を収束させ、ねらいに沿って一人一人評価する→全員が本時のねらいを実現している
か。

学習は中途半端にせず、振り返りをしっかり行うことで生徒全員がねらいを達成しているか
を確認する。これら4つのポイントを教員評価の際に生かしながら、後輩を育ててほしい。

中学校 第2分科会

司会者 坂東市立南中学校 古矢 勲
提案者 坂東市立東中学校 小林 清
記録者 坂東市立猿島中学校 倉持 英夫
講師 県西教育事務所 人事課長 稲川 善成 先生



【協議題】 創意と自校の実情を生かした学校経営の研究と実践
－知力・気力・体力をかねそなえた人間性豊かな生徒の育成をめざす小規模校の取組－
坂東市立東中学校長 小林 清

【提案趣旨】

1 本校の概要

生徒数170名の県西管内でも最も小規模の学校である。生徒は全体的に落ち着いており、職員との人間関係も良い。小規模のため、人間関係は築きやすいが、反面学校全体を盛り上げるのが困難である。生徒の仲間意識は強いが、切磋琢磨の面に弱さがある。職員同士の意思疎通が図りやすいが、組織としての意識が弱い。本校の課題としては、学力の向上と規範意識の高揚があげられる。

2 本校の重点目標

- (1) 自ら学び確かな学力を身につけた生徒の育成
- (2) 豊かな心と夢をはぐくむ生徒の育成
- (3) 心身ともにたくましく健康安全に努めるさわやかな生徒の育成

3 実践 *発表では、主に重点目標(1)、(2)について説明

- (1) 自ら学び確かな学力を身につけた生徒の育成
 - ① 校内授業研究
 - ・全職員、年2回の研究授業を実施（2回目は研修センターの先生を招聘）
 - ② パワーアップタイム、パワーアップ講座
 - ・授業以外に、放課後や夏期休業中に指導を行う。
 - ③ 学生チューターの活用
 - ・市の予算にもとづいて、大学生等を授業や補習に活用。
 - ④ 授業力ブラッシュアップ重点校（数学）
 - ・授業の組み立てや生徒の活動について教科を超えて得るものがあった。
- (2) 生徒会の活性化にむけて
 - ① ランチミーティング
 - ・月1回程度、生徒会役員と担当職員と校長で、給食を食べながら話し合いを実施。
 - ② 学級旗発表会
 - ③ あいさつ運動
 - ④ 球技会
- (3) 学区内小学校との連携
 - ・相互授業参観や夏休みの部会ごとの話し合い、小中合同の引渡訓練

4 成果と課題

- (1) 学力向上
 - ・多少向上してきた。県平均を上回っている。
 - ・生徒にとってどう魅力ある授業をいかにつくっていくかが課題である。
 - ・職員の意識の向上をさらに高めていく必要がある。
- (2) 規範意識の高揚
 - ・全体としてのモラルの向上は高まってきた。
 - ・生徒の可能性を信じ、自主性を尊重しながら様々な取組に向かわせていきたい。

5 終わりに

生徒達が笑顔で生活できる学校でありたい。

【研究協議】 ※ 司：司会，質：質問，答：答え，発：発言

質 坂東市として、小中連携の方針が出されているのか。

答 きちんとした方向性は出されていないが、連携をするようには委員会からは言われている。小学生が中学校に進学したとき困らないようにするためにも良いことだと思う。

発 小学生が複数の中学校に進学する場合には、小中連携の方法に様々な困難がある。

司 他の学校で、小中連携の例はないか。

発 明野中学区では、校長、教務、一般職員それぞれのレベルで研修会を実施している。その地域の実態に応じて話し合いを進めていくといいのではないかと。

発 小中連携はあくまで手段である。各小学校の独自性は尊重しつつ、中学校ではそれをどう融合させていくか考えながらやっている。

質 ランチミーティングは、どの位の頻度で、どんな内容を話し、どんな成果が出ているのか。

答 月1、2回程度、校長室で行っている。文化祭やあいさつ運動などについて、生徒達の考えを聞いたり、校長としての願い等を話したりする。成果と言うよりも、小さな学校だけに少しでも学校のことを考えられるリーダーが育ってほしい気持ちでやっている。

質 あいさつ運動を活性化するにはどうしたらいいか、他の学校の例を教えてください。

発 坂東南中では、生徒会で目標人数を決定し、それに向かって取り組んでいる。

発 明野中では、表彰を行ったり、幟を作成したりしながら、活性化を図っている。

質 業務の効率化の取組の中で、部活動について教えてください。

答 朝練も土日の部活も、思い切ったこと打ち出さないと業務の効率化は難しい。

発 朝練を行わないように統一した市もある。

【講師指導】

○ 小林校長先生の発表から

- ・東中が抱えている小規模校としての課題は、全国ほぼ一致しているようである。その中で、職員一人一人の持っている思いを1つにしようと「明るく、温かく、さわやかに」のキャッチフレーズを掲げ、戦略的に取り組んできたことが素晴らしい。
- ・「授業力ブラッシュアップ重点校」の指定を受け、授業にしっかりメスを入れた校長の決断力と勇気に敬意を表する。
- ・市の事業を積極的に活用し、現在ある資源を食欲に利用しているところが良い。
- ・学びの連続性としての小中連携は、今後より充実していく必要がある。桜川市は、めざす児童生徒の姿を共有した取組をしている。他市町の実践例を参考にされたい。
- ・生徒会の活性化において、ランチミーティングのように生徒の土俵に入った取組が良い。
- ・小規模学校は、全員の生徒でやろうとするダイナミックさを自分たちで体現していくことで、個人や集団が成長することに繋がる。集団力学の視点で、特別活動の充実を図りたい。
- ・あいさつ運動の活性化については、生徒会活動に加え、例えば部活動のキャプテン会議を通して所属集団の意識化と実践力を生かした取組も効果的である。
- ・東中では、業務の効率化のために、全員参画プロジェクトチームで取り組んだ経験があることから、学校組織マネジメントは十分に機能すると思うので、小規模校ならではのオリジナルのプロジェクトを期待したい。



○ 今後の取組に期待したいこと

- ・キャリア教育の充実のため、心を揺さぶる感動体験の仕掛けを行ってほしい。
- ・本校の魅力やよさを生かすために全職員でSWOT分析をし、ボトムアップを図った学校経営をお願いしたい。
- ・若手教員の授業力向上のために、生徒からの授業評価、検証された指導案の収集、先進校視察、近隣中学校との相互授業参観、中中連携授業交流等を実施してほしい。
- ・生徒会活動において、東中学校区の小中連携や市内外生徒会との交流を行ってほしい。

講演会

演題 「不揃いの木を組む」 講師 宮大工棟梁 小川 三夫 先生

1947年栃木県生まれ。

高校の修学旅行で法隆寺五重塔を見る。これにより、卒業後、法隆寺宮大工の故西岡常一（つねいち）棟梁の門を叩くが断られる。

仏壇屋などで修業後、西岡棟梁の唯一の内弟子となる。法輪寺三重塔、薬師寺金堂、薬師寺三重塔の再建に副棟梁として活躍する。最後の宮大工といわれた名工、西岡常一棟梁（明治41年～平成7年）がただ一人だけ棟梁として育てた弟子が小川三夫棟梁。

1977年徒弟制を基礎とした寺社建設専門会社「鵜工舎（いかるがこうしゃ）」を栃木県塩谷町に設立。全国各地の寺院の改修、再建、新築等にあたる。小川棟梁のもと、巣立った弟子は100人を超える。

さらに、奈良（斑鳩）と栃木（鵜工舎）を行き来し仕事をしている傍ら、全国各地で講演をされている。また、つくば市にある教員研修センターでの研修（中央研修等）の講師も長年勤められ、ご活躍されている。



小川三夫「不揃いの木を組む」文春文庫より

主な著書

「棟梁～技を伝え、人を育てる」 文春文庫

「木の命木の心」

（天 西岡常一 地 小川三夫 人 塩野米松） 新潮文庫

「不揃いの木を組む」 文春文庫

平成27年度

研究委員長	白井章	(真壁小)
研究副委員長	栃木利人	(古河一中)
研究副委員長	竹田恒夫	(境小)
研修・記録委員長	須藤和彦	(関城東小)
研修・記録委員	大林邦仁	(小栗小)
研修・記録委員	小嶋清志	(総上小)
研修・記録委員	杉山靖	(谷貝小)